

# 1. 難治性疾患対策について

## 難病対策の背景

- 昭和33年 スモン  
 当時は原因が不明  
 治療法未確立  
 疾患に対する社会的不安  
 スモンの方々の救済
- 昭和46年 スモン調査研究協議会がスモン入院患者  
 に対して月額1万円(当時)を治療研究費より支出
- 昭和47年 スモン調査研究協議会の総括的見解  
 ～「キノホルム剤の服用による神経障害」

- スモンの研究体制が他の難病に関する研究に対しても成功を収めることが可能ではないか。
- 昭和45年 「原因不明でかつ社会的にその対策を必要とする特定疾患については、全額公費負担とすべきである」(社会保険審議会答申)
- 昭和47年 国会において難病に関する集中審議
- 昭和47年 厚生省「難病対策要綱」  
総合的な難病対策の指針

2

### 難病対策要綱(昭和47年厚生省)

#### <疾病の範囲>

○取り上げるべき疾病の範囲について整理

- (1)原因不明、治療方法未確立であり、かつ、後遺症を残すおそれが少なくない疾病
- (2)経過が慢性にわたり、単に経済的な問題のみならず介護等に著しく人手を要するために家庭の負担が重く、また、精神的にも負担の大きい疾病

#### <対策の進め方>

- 1)調査研究の推進
- 2)医療施設の整備
- 3)医療費の自己負担の解消



昭和47年 ○スモン、○ペーチェット病、○重症筋無力症、○全身性エリテマトーデス、サルコイドーシス、再生不良性貧血、多発性硬化症、難治性肝炎 からスタート (○は医療費助成の対象)

3

特定疾患治療研究事業の概要  
(いわゆる難病の医療費助成)

1. 目的

原因が不明であって、治療方法が確立していない、いわゆる難病のうち、治療が極めて困難であり、かつ、医療費も高額である疾患について医療の確立、普及を図るとともに、患者の医療費の負担軽減を図る。

2. 実施主体 都道府県

3. 事業の内容

対象疾患の治療費について、社会保険各法の規定に基づく自己負担の全部又は一部に相当する額の1/2を毎年度の予算の範囲内で都道府県に対して補助

4. 患者自己負担

所得と治療状況に応じた段階的な一部自己負担あり  
 上限額 入院 0~23,100円/月 外来等 0~11,550円/月  
 ※対象者が生計中心者である場合は上記金額の1/2

5. 対象疾患

難治性疾患克服研究事業のうち臨床調査研究分野の対象疾患(130疾患)の中から、学識者から成る特定疾患対策懇談会の意見を聞いて選定しており、現在、56疾患が対象となっている。

<参考>臨床調査研究分野の対象疾患

- 次の4要素(①~④)から選定し、現在、130疾患が対象となっている。
- ①希少性:患者数が有病率からみて概ね5万人未満の患者とする。
  - ②原因不明:原因又は発症機序(メカニズム)が未解明の疾患とする。
  - ③効果的な治療方法未確立
  - ④生活面への長期にわたる支障(長期療養を必要とする)

4

自己負担限度額表

| 階層区分 |  | 対象者別の一部自己負担の月額限度額 |        |  |
|------|--|-------------------|--------|--|
|      |  | 入院                | 外来等    | 生計中心者が患者本人の場合  |
| A    | 生計中心者の市町村民税が非課税の場合                     | 0                 | 0      | 0  |
| B    | 生計中心者の前年の所得税が非課税の場合                    | 4,500             | 2,250  | 対象患者が生計中心者であるときは、左欄により算出した額の1/2に該当する額をもって自己負担限度額とする。 |
| C    | 生計中心者の前年の所得税課税年額が5,000円以下の場合           | 6,900             | 3,450  |  |
| D    | 生計中心者の前年の所得税課税年額が5,001円以上15,000円以下の場合  | 8,500             | 4,250  |  |
| E    | 生計中心者の前年の所得税課税年額が15,001円以上40,000円以下の場合 | 11,000            | 5,500  |  |
| F    | 生計中心者の前年の所得税課税年額が40,001円以上70,000円以下の場合 | 18,700            | 9,350  |  |
| G    | 生計中心者の前年の所得税課税年額が70,001円以上の場合          | 23,100            | 11,550 |  |

- 備考: 1. 「市町村民税が非課税の場合」とは、当該年度(7月1日から翌年の6月30日をいう。)において市町村民税が課税されていない(地方税法第323条により免除されている場合を含む。)場合をいう。
2. 10円未満の端数が生じた場合は、切り捨てるものとする。
3. 災害等により、前年度と当該年度との所得に著しい変動があった場合には、その状況等を勘案して実情に即した弾力性のある取扱いをして差し支えない。
4. 同一生計内に2人以上の対象患者がいる場合の2人目以降の者については、上記の表に定める額の1/10に該当する額をもって自己負担限度額とする。

5



# 難病対策に関する課題

## 1 医療費助成(特定疾患治療研究事業)における問題

### ① 対象疾患(医療費助成制度の「谷間」)

#### ・難治性疾患

難治性疾患であって、特定疾患治療研究事業の対象疾患(56疾患)とならないものは、高額療養費制度以外の医療費軽減の仕組みがない。

一方で、難治性疾患の要件を満たしていない疾患の取扱いについても検討が必要。

#### ・小児慢性特定疾患(キャリアオーバー問題)

小児慢性特定疾患治療研究事業の対象疾患(例:胆道閉鎖症など)であって特定疾患治療研究事業の対象とならないものについては、20才以降、医療費助成を受けることができない。

### ② 安定的な財源の確保

受給者増・医療費増が見込まれる中で本事業について十分な予算を確保できない状態が続いており、安定的な財源を確保できる制度の構築が課題。

### ③ 医療費助成事業の性格

希少疾患の症例確保を効率的に行うという研究事業でありながら、公費で医療費助成を行うという福祉的側面を有する本事業のあり方について、検討が必要。この際、保険制度等との関連も検討する必要。

8

## 2. その他の医療費助成制度について(参考)

# 小児慢性特定疾患治療研究事業

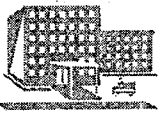
○ 小児慢性疾患のうち、小児がんなど特定の疾患については、その治療が長期間にわたり、医療費の負担も高額となることからその治療の確立と普及を図り、併せて患者家庭の医療費の負担軽減にも資するため、医療費の自己負担分を補助する制度。

## 事業の概要

- 対象年齢 18歳未満の児童（ただし、18歳到達時点において本事業の対象になっており、かつ、18歳到達後も引き続き治療が必要と認められる場合には、20歳未満の者を含む。）
- 補助根拠 児童福祉法第21条の5、第53条の2
- 実施主体 都道府県・指定都市・中核市
- 補助率 1/2（負担割合：国1/2、都道府県・指定都市・中核市1/2）
- 自己負担 保護者の所得に応じて、治療に要した費用について一部自己負担がある。ただし、重症患者に認定された場合は自己負担はなし。

## 沿革

- 昭和43年度から計上
- 昭和49年度 整理統合し4疾患を新たに加え、9疾患群からなる現行制度を創設。
- 平成2年度 新たに神経・筋疾患を加え、10疾患群とする。
- 平成17年度 児童福祉法に基づく法律補助事業として実施するとともに、慢性消化器疾患群を追加し11疾患群とする。また、日常生活用具給付事業などの福祉サービスも実施。



## 対象疾患

- 11疾患群(514疾患)  
106,368人  
※H20年度給付人数
- ① 悪性新生物
  - ② 慢性腎疾患
  - ③ 慢性呼吸器疾患
  - ④ 慢性心疾患
  - ⑤ 内分泌疾患
  - ⑥ 膠原病
  - ⑦ 糖尿病
  - ⑧ 先天性代謝異常
  - ⑨ 血友病等血液・免疫疾患
  - ⑩ 神経・筋疾患
  - ⑪ 慢性消化器疾患

すべて  
入院・通院  
ともに対象

10

小児慢性特定疾患治療研究事業における自己負担限度額表

| 階層区分  | 自己負担限度額 |       |
|---|---------|-------|
|   | 入院      | 外来    |
| 生活保護法の被保護世帯及び中国残留邦人等の円滑な帰国の促進及び永住帰国後の自立の支援に関する法律による支援給付受給世帯 | 0       | 0     |
| 生計中心者の市町村民税が非課税の場合  | 0       | 0     |
| 生計中心者の前年の所得税が非課税の場合   | 2,200   | 1,100 |
| 生計中心者の前年の所得税課税年額が5,000円以下の場合                                | 3,400   | 1,700 |
| 生計中心者の前年の所得税課税年額が5,001円以上15,000円以下の場合                       | 4,200   | 2,100 |
| 生計中心者の前年の所得税課税年額が15,001円以上40,000円以下の場合                      | 5,500   | 2,750 |
| 生計中心者の前年の所得税課税年額が40,001円以上70,000円以下の場合                      | 9,300   | 4,650 |
| 生計中心者の前年の所得税課税年額が70,001円以上の場合                               | 11,500  | 5,750 |

(備考)

1. 「市町村民税が非課税の場合」とは、当該年度(7月1日から翌年の6月30日をいう。)において市町村民税が課税されていない(地方税法第323条により免除されている場合を含む。)場合をいう。
2. この表の「所得税課税年額」とは、所得税法(昭和40年法律第33号)、租税特別措置法(昭和32年法律第26号)及び災害被害者に対する租税の減免、徴収猶予等に関する法律(昭和22年法律第175号)の規定によって計算された所得税の額をいう。ただし、所得税額を計算する場合には、次の規定は適用しないものとする。
  - (1) 所得税法第78条第1項、第2項第1号、第2号(地方税法第314条の7第1項第2号に規定する寄附金に限る。)、第3号(地方税法第314条の7第1項第2号に規定する寄附金に限る。)、第92条第1項、第95条第1項、第2項及び第3項
  - (2) 租税特別措置法第41条第1項、第2項及び第3項、第41条の2、第41条の3の2第4項及び第5項、第41条の19の2第1項、第41条の19の3第1項及び第2項、第41条の19の4第1項及び第2項並びに第41条の19の5第1項
  - (3) 租税特別措置法の一部を改正する法律(平成10年法律第23号)附則第12条
3. 10円未満の端数が生じた場合は、切り捨てるものとする。
4. 災害等により、前年度と当該年度との所得に著しい変動があった場合には、その状況等を勘案して実情に即した弾力性のある取扱いをして差し支えない。
5. 同一生計内に2人以上の対象患者がいる場合は、その月の一部負担額の最も多額な児童以外の児童については、上記の表に定める額の1/10に該当する額をもって自己負担限度額とする。
6. 前年分の所得税又は当該年度の市町村民税の課税関係が判明しない場合の取扱いについては、これが判明するまでの期間は、前々年分の所得税又は前年度の市町村民税によることとする。

11

## 自立支援医療制度の概要

○ 根拠法  
障害者自立支援法

○ 概要

障害者（児）が自立した日常生活又は社会生活を営むために必要な心身の障害を除去・軽減するための医療について、医療費の自己負担額を軽減するための公費負担医療制度

○ 対象者

- ・更生医療：身体障害者福祉法第4条に規定する身体障害者で、その障害を除去・軽減する手術等の治療により確実に効果が期待できるもの（18歳以上）
- ・育成医療：児童福祉法第4条第2項に規定する障害児（障害に係る医療を行わないときは将来障害を残すと認められる児童を含む。）で、その障害を除去・軽減する手術等の治療により確実に効果が期待できるもの（18歳未満）
- ・精神通院医療：精神保健福祉法第5条に規定する精神疾患（てんかんを含む。）を有する者で、通院による精神医療を継続的に要するもの

○ 対象となる障害と治療の例

▶ 更生医療・育成医療

肢体不自由・・・関節拘縮→人工関節置換術

視覚障害・・・白内障→水晶体摘出術

内臓障害・・・心臓機能障害→ペースメーカー埋込手術

腎臓機能障害→腎移植、人工透析

▶ 精神通院医療（精神疾患）：精神科専門療法、訪問看護

○ 費用負担

1割負担を原則とするが、一部を除き、医療保険単位の世帯ごとの所得（市町村民税の課税状況等）等に応じ、月ごとの負担に上限額が設けられている。

また、重度かつ継続（費用が高額な治療を長期間にわたり継続しなければならない者の場合）については、更に、月ごとの負担の上限額の軽減措置を実施。

※ 自立支援医療は保険優先のため、実際は、保険支払後の（一般の方であれば3割の）自己負担との差額分を自立支援医療制度において負担。

12